【論　文】

保育におけるメディア活用に関する認識の変容

―子ども向けアプリの体験を通して―

大　塚　紫　乃*

要　約

スマートフォンやタブレット端末のようなメディアの普及が目覚ましい現在，保育におけるメディア活用について議論されるようになってきた。しかし，保育の現場ではメディア活用の実践は少なく，抵抗感を持つ場合もある。本研究では，保育者養成校の学生が，これからの保育実践としてメディア活用についてどのように認識しているのか調査した。また，子どもとメディアに関する議論を知り，子ども向けのアプリを体験することを通して，保育におけるメディア活用の認識が変容していくのか検証した。

1.　問題

1.1　社会的背景

現代社会ではIT化が加速し，情報機器があらゆる場面で使われるようになっている。特に，ここ数年でのスマートフォンやタブレット端末普及率の増加は目覚ましい。総務省の情報通信白書によれば，2015年の世帯でのスマートフォン保有率は7割を超えている。タブレット端末保有率は3割であるが，2010年からの5年間でおよそ4倍に増えている。これは，子育て世帯のみに焦点を当てても同様である。ベネッセ教育総合研究所の調査によると，乳幼児を持つ母親のスマートフォン所有率は，2013年から2017年で60.5%から92.4%に，タブレット端末所有率は29.3%から38.4%に増えている。

これらの調査結果を踏まえると，これからの時代において，乳幼児がスマートフォンやタブレット端末のようなメディアを使うことは一般的になると思われる。そのため，大人は乳幼児とメディアの関係について敏感になる必要がある。

*江戸川大学こどもコミュニケーション学科 講師

1.2　子どもとメディア

子どもとメディアの関係については様々な議論が行われてきた。アメリカと日本での乳幼児のメディア使用に関する声明について，森田・堀田・佐藤・松河・松山・奥林・深見・中村（2015）から議論の流れを以下にまとめる。

テレビで子ども番組が放送されるようになり，新しいメディアとして子どもの生活に入ってきた頃，アメリカ小児医学会では子どものテレビ視聴についての提言が行われた。保護者等との直接的な交流が必要であり，特に2歳未満の子どものテレビ視聴は避けるべきという内容であった。これに続き，日本の小児医学会でも，乳幼児のテレビの長時間視聴の悪影響について懸念する内容の声明が出された。その後インターネットのような新しいテクノロジーが発達した頃，メディアが子どもに与える良い影響についても言われるようになった。アメリカ幼児教育学会では，双方向メディアが子どもの経験を広げる機会として利用されるべきであると提言した。ただし，受動的で双方向でないメディアの使用は抑制されるべきで，2歳未満の子どもは，双方向的メディアであっても使用が制限されるべきであると述べられている。

以上のまとめからは，新しいメディアを子どもに与えることに対して，悪影響を懸念する議論が行われてきたことがわかる。一方で，近年では，新しいテクノロジーを教育場面で活用し，受動的でない形で取り入れようとしている流れもうかがえる。

1.3 保育場面でのメディア活用

子どもの生活に様々なメディアが浸透している現在，大人はメディアの良い面と悪い面を意識して，子どものメディア活用について考える必要があると思われる。

家庭においては，スマートフォンやタブレット端末等で写真や動画を見せることが多くなっているが，子どものメディア使用について抵抗感を持っているという現状がある（ベネッセ教育総合研究所, 2017）。メディア使用が子どもにもたらす影響を意識し，親子一緒にコミュニケーションをとりながら使用していることがわかる。

乳幼児のもう一つの生活の場である保育園や幼稚園では，家庭に比べてメディアの使用は進んでいない。保育の現場においてはメディアを使用した活動以外に重要な教育があるという考え方が主流である（旦, 2013）。しかし，時代の変化に合わせて，タブレット端末を使った活動事例が報告され始めている。

安部（2015）は，幼稚園でのタブレット端末の活用方法について報告をしている。タブレット端末を導入し，自由に子どもたちに使ってもらったところ，年長クラスでは1年間の使用を通して，積極的に活用する様子が見られた。はじめは，写真を撮るだけであったが，静止画や動画を用いた観察記録をするうちに，テレビ番組や映画を作るという遊びに用いるようになった。子どもたちは，何かをするための道具としてタブレット端末を活用していた。道具として機能を発揮することを子どもたちが分かれば，タブレット端末は子どもの遊びを発展させるものとして有効であることがうかがえる。

子ども向けのアプリケーションの開発も近年進んでおり，アプリを使用した活動実践も報告されている。

スマートエデュケーションのウェブサイトでは，こどもモードKitSという園児向けのICTを活用した教育カリキュラムを紹介している。たとえば，「〈グループでアイデアを出そう〉iPadでお絵描き」というカリキュラムでは，お絵描きのアプリを使用して，簡単な図形が書かれた下絵から発想を広げて自由に絵を描く活動が行われる。その時に重要になるのが，グループで話し合いアイデアを広げるという体験である。そして，完成した絵を発表することでクラスの友だちと共有する体験もできる。タブレット端末の特性を活かすことによって，活動が広がり，簡単に共有したり発表したりすることができると言える。

また，園での実践ではないが，子どもが絵本をつくることのできるアプリの活動の報告もある。ピッケのつくるえほん®は，キャラクターや様々な場面のアイテム，背景を選び，画面上で配置することでおはなし作りができるアプリである。就学前の子どもは，文字を入れるなど難しいところは大人に手伝ってもらいながら，自分のおはなしを形にすることができる。できたおはなしは画面に映し出したり，小さな絵本として製本したりできる。自分の作った絵本を共有することで，さらに他者との対話を生むことができると言える。

1.4 保育者のメディアに対する認識と評価

堀田・松河・奥林・森田・深見・中村・松山・佐藤（2014）は，幼稚園においてタブレット端末を使用する意欲について調べた。その結果，タブレット端末の使用については，全般的に意欲が低い傾向にあることがわかった。使いたい用途としては，「幼児が育てている小動物や植物をカメラ機能で撮影して，その様子を振り返る」「図鑑アプリで，幼児が興味・関心を持った内容を調べる」「保育者が運動会の練習風景などを撮影・記録して，プロジェクタで大きく投影して振り返る」といった取り組みがあった。

保育現場においては，タブレット端末の導入や子ども向けアプリの活用が進んでいないことから，松山・堀田・佐藤・奥林・松河・中村・森田・深見（2016）は，アプリ活用を想定した

際の評価観点を調べた。その結果,「実生活と関連した知識やスキルの獲得」「創造性や試行錯誤を伴う活動の促進」「共同・協同遊びの促進」という3つの面がアプリの効果としてあるかどうかが評価観点として抽出された。

新しいメディアであるタブレット端末は，保育園や幼稚園において，あまり活用されていないため，保育者としても抵抗があり，活用のイメージを持てないようである。実生活と関連した形で，どのように活用できるのか，保育者自身が具体的に理解することが重要であると思われる。

これからの保育者を育てる際にも，保育におけるメディア活用について取り上げて教育することは必要であると考える。現在保育者を目指す学生は，すでにスマートフォンのようなメディアを使いこなしている世代である。新しい保育実践について教育を行うためにも，現在の学生が保育においてメディアを活用することに抵抗感を持つのか知ることは有意義である。メディアに対する学生の認識を知ったうえで，保育者養成においてどのような教育を行うことが，将来の実践において役立つのか検証していくことが必要であると思われる。

学生が子どもとメディアに関する幅広い議論を学び，保育場面でのメディアの活用例を知って実際に体験することは有効な方法であると考える。このような学習を通して，保育におけるメディア活用に関する学生の認識が，一面的なものから多面的なものへと変容する可能性がある。保育の本質を捉えた上で，メディア活用の可能性について柔軟に考えられるような保育者養成を目指すことが重要ではないかと考える。

2. 子どもとメディアに関する授業実践

2.1「こどもと読み聞かせ・メディア」

江戸川大学のこどもコミュニケーション学科は，保育者養成を目指す学科である。学科独自の科目として3年生以上の学生を対象とした「こどもと読み聞かせ・メディア」がある。この科目では，これからの時代に保育者となる学生に対し，子どものメディア使用について広い考えを持ってもらうことを目指している。

授業内容としては，子どもとメディアに関するこれまでの議論の講義（本稿の1.2に記述），子ども向けのアプリの体験，保育におけるメディア活用の事例紹介（本稿の1.3に記述）が含まれている。

2.2 子ども向けアプリの体験

授業では，iPadを用いて実際に子ども向けアプリを体験した。読み聞かせが授業のテーマであるため，デジタル絵本のアプリを選択した。複数のアプリをダウンロードし，グループで自由に遊んでもらった。絵を触ると動いたり，朗読が流れたりするという特徴があった。

学生は，子ども向けのアプリを初めて体験し，いくつもの種類のデジタル絵本を操作していた。感想として「絵をタッチするとアクションがあり，それだけでも楽しめた。」「タッチした音がいろいろなパターンがあって面白かった。」「絵に重なりがあるため奥行きが感じられた。」「普通の絵本に興味がない子でもアプリで動きがあれば興味を持ちそうだと思った。」「何回もやりたくなるので，絵本が好きになりそう。」などの楽しみに関する内容が出てきた。一方で,「操作に夢中になって話が入ってこない。」「短時間でも目が疲れてしまった。」などのデジタル絵本としてのネガティブな側面についての感想も出てきた。

学生は，アプリを体験するときに，ゆっくりとした読み語りを聞くことよりも，画面を次々とタッチすることに夢中になっていた。絵本としての活用というよりも，ゲームのような活用に偏っていたと思われる。繰り返しお話を楽しむことができていなかったため，すぐに飽きている様子も見受けられた。

デジタル絵本アプリの体験を通して，デジタルならではの楽しみを感じた一方，活用の仕方をよく理解せずに遊んだために，じっくりとは楽しめていない様子であった。どのように活用するのかについて教員側から伝えることによっても，感想の内容は変わった可能性はある。

2.3 メディア活用に関する学生の認識

授業で子どもとメディアに関する講義や子ども向けアプリケーションの体験をする前後において，子どものメディア活用に関する学生の認識を知るための質問を行った。

授業で子どもとメディアに関する情報を与える前に「①子どもに新しいメディアを与えるべきか」という問いを与えた。

子どもとメディアに関する懸念や期待される効果の情報を与え「②テレビやビデオを含むメディアを使用する際，親子の関わりについて気を付けるべき点は何か」という問いを与えた。デジタル絵本のアプリの紹介と体験を行った後に「③子どものデジタル絵本との付き合い方で気を付ける点はどこか」という問いを与えた。アプリを使った保育実践の紹介を行った後に「④これからの保育で何を大切にするべきか」という問いを与えた。

各問い対する代表的な回答を以下にまとめる（表1~4）。通し番号は人物と一致し，同じ番号の回答は同じ学生の回答である。

「①子どもに新しいメディアを与えるべきか」という問いに対しては，他の遊びができなくなるという心配から与えるべきでないという意見，新しいメディアを使いこなす力をつけるために与えるべきという意見が見られた。与えるべきという考えであっても，メディアの悪影響を考慮する視点を持つ学生もいた。

ただし，この問いは，家庭におけるメディアの活用を念頭に置いて回答しており，保育場面での活用はイメージしていないようであった。授業を受ける学生は3年生であり，保育について学んできているが，メディアを活用した保育実践については，あまり触れる機会がなかったと言える。

表1　「①子どもに新しいメディアを与えるべきか」に対する回答

1	与えなくてもよいと思う。実際に体験する機会が減っていると思うので，メディアを増やすよりは，外に出て遊びなどを子どもたちとした方が良いと思う。
2	与えない方が良い。依存して遊ばなくなる。勉強に効率よく使うならいいが，与えない方が良い。
3	ある程度は与えるべきだと思うが，与えすぎると自然と触れ合う機会が少なくなり，感性が育ちにくくなるので，与えすぎはよくないと思う。
4	子どもが知りたいと思う欲求があるなら与えるべきだと思う。なぜだろうと思う気持ちが学びにつながるので新しいメディアを与えることはいいと思う。
5	与えるべきだと思う。新しいものをどんどん取り入れることでいろいろなものへの興味が広がるし，好奇心も育つと思う。ただずっとスマホに夢中になるなどしないよう注意が必要。
6	現代社会に順応するうえで新しいメディアに触れる必要はあると思うが，その新しいメディアがどのような影響を与えるかを考え理解したうえで，正しい形態や量で与える必要があると思う。
7	積極的に与えるべきではない。最近は便利なアプリが増えてきているので，必要なときには頼ってもいいと思うが，必要でないときには紙の絵本など昔からのメディアを使った方が良いと思う。
8	次々に新しいメディアが増え続けているので，どんなものかを知る程度には触れるべき。しかし親がそのメディアを理解し，親の目の届く範囲での使用にする。
9	制限するべきだと思う。タブレットで遊んだりゲームする子どもを見るが，そればかりに集中して周りの子とコミュニケ―ションをとらなくなる。
10	使い方による。現在は様々なメディアがあるが，上手に扱えている大人はあまりいないと思う。子どもにメディアを与えてもいいと思うが，大人自身も子どもの模範になれるような扱い方をすれば，子どもに良い影響があるのではないか。
11	新しいメディアが現れるということはその技術が今後当たり前に使用されると思う。少しでも触れ，慣れることが必要。
12	メリット・デメリットをよく考えて，デメリットが多く考えられるなら与えるべきではないと思う。現在のスマホやタブレットは，そればかりに頼りがちになるため，私はあまり賛成できない。

「②テレビやビデオを含むメディアを使用する際，親子の関わりについて気を付けるべき点は何か」に対しては，全員が親子一緒に楽しむことが重要であると答えていた。受動的なメディ

ア視聴の懸念について講義で伝えたため，このような内容になったと思われる。子どもの年齢によって関わり方を変えるという回答も見られた。年齢によってテレビ視聴が制限されるべきという議論からこのような考えが生まれたと思われる。子どもの年齢による発達に配慮する視点は重要である。

表2 「②テレビやビデオを含むメディアを使用する際，親子の関わりについて気を付けるべき点は何か」に対する回答

1	テレビでは，動きながら見るときには，一緒に歌ったり踊ったりして楽しむ。静かに集中して見られるようになれば，子どもがどのようなものに興味を持っているのかを知り，親子の会話の話題を見つけるようにするとよいと思う。
2	1～3歳ぐらいの時までは一緒に見て話をしながら楽しむ。4歳からは一人で見させてもいいと思う。子どもが一緒に見てほしいなら一緒に見る。
3	一緒に見ることができるときはなるべく一緒に見た方がいいと思う。そうすることでコミュニケーションをとる機会が増え，親子の絆も深まる。
4	子どもが集中して見ている際，そばに寄り添い，一緒に見る。子供が指差しをして何かを伝えようとしている際，受け答えをしていく。
5	一緒に隣に並んで「面白い！」「話したい」と思った時に話すのが良いと思う。子どもの様子を見ながら親が声をかける。
6	感想や発見などを共感しあえる距離感が大切だと思う。共感することで大人との愛着も深まると思う。
7	小さいころは子どもと一緒にテレビの内容を楽しむこと，5，6歳になったら子どもが集中して見ることができるように少し離れてみるとよいと思う。子どもの感じた疑問や抱いた感想に応えることが大切だと思う。
8	どの年齢の子どもも一緒に見る。その方が何に興味を持つのかがわかりやすいと思う。
9	物づくりの番組では一緒に見ながら作り，創造性が豊かになる。
10	子どもの近くにいて，子どもの疑問や質問に答えながら視聴するのがいいと思う。子どもとの情報の共有や言葉のやりとりがしっかりできると思う。
11	子ども一人で見させず親子一緒に楽しむ。共通の話題や楽しみが増え親子の仲が深まると思う。
12	一緒に見て，一緒に体を動かしたり，一緒に歌ったり，内容について話しながら見ることが良いと思う。どの年齢でも親と子一緒に楽しむことが良い。

「③子どものデジタル絵本との付き合い方で気を付ける点はどこか」に対しては，②の問いに対する回答と同様で，親子一緒に取り組むという回答が多かった。また，デジタル絵本と紙絵本のどちらかに偏るのではなく，様々なメディアに触れるべきであるという視点が入っていた。デジタル絵本のアプリを体験した後であったため，夢中になって長時間取り組んでしまう懸念を抱いているようであった。使用時間のルール作りも必要であるという回答も見られた。デジタル絵本は，操作を覚えれば一人でも遊べてしまうという感覚から，デジタル絵本に頼りすぎない方が良いという意見もあった。

表3 「③子どものデジタル絵本との付き合い方で気を付ける点はどこか」に対する回答

1	時間を決める。子どもが読んでいたら話しかけ一緒に参加する。一人にさせすぎないことを心がける。紙絵本に触れる機会を減らさないようにする。
2	長時間は避け，依存しないようにする。
3	紙絵本も取り入れつつ，たまにデジタル絵本を入れることで子どもの学びの幅が広がると思う。デジタル絵本に頼りすぎるのはよくないと思う。
4	デジタル絵本のみではなく，紙絵本などその他も加えることが重要だと思う。偏った活動は避ける。使う時間を親や保育者が管理する。
5	目への悪影響があるので食いつき過ぎないように適度な距離で見る。長時間は使わない。
6	適度な時間と回数にする。一人だけで見せるのではなく，一緒に見て楽しむと大人と子どもの関わりも育まれると思う。
7	依存しないように気を付ける。デジタル絵本に頼りすぎず，紙絵本も読む。
8	長時間使用しない。紙とデジタルの両方をバランスよく使う。
9	時間や何冊までかを決める。子ども一人で使わせないようにする。
10	目に良くないので長時間の使用は避けるべき。大人も一緒に読むといい。
11	長時間見ず，休憩をとること。生活習慣をしっかり定め，その中で楽しむこと。
12	絵本の内容について親子で会話する。

「④これからの保育で何を大切にするべきか」については，多くの記述が得られた。保育でのiPadの活用例を知り，デジタルならではの利点

を実感できていた。活用例は，グループで活動しコミュニケーション能力を育むことを目標としており，デジタルであっても子ども同士の関わりを促す方法があると知ったことは学生にとって驚きだったようである。

保育においてもタブレット端末を活用できるイメージを持ち，取り入れていくべきであると考えている学生が多かった。ただし，一つのメディアに偏るべきではなく，バランスよく取り入れること，何を育てたいのか考えて取り入れることが大切であることに気付いていた。

①において，新しいメディアは与えるべきでないと考えた学生は，電子的なメディアは子どもにとって悪であるという認識であったが，使い方を考えれば良い影響も与えられるという認識に変わった。また一方で，アナログ的に直接体験することの重要性も際立ち，理解されたと思われる。

表4 「④これからの保育で何を大切にするべきか」に対する回答

1	正解を教えるのではなく，考える方法をアドバイスすることが大切。今までの保育にプラスしてICTを取り入れるべきだと思う。体験し経験したことを表現するときにタブレットを使ってまとめて発表する形が良い。グループで発表するときは協力して作り上げる楽しさ，一人でやるときは他の人のものを見ることでアイデアの参考になる。こういう体験をすることで自分の世界を広げている。
2	絵本を自分で作るというのは幼児期から必要だと考える。どんなものにするか，どうすればよいかなど考える力，創造力などが育つ。タブレットを使ってICT活用力も育まれる。使用できる時間などを決めて保育者がしっかりと見ていれば，iPadを導入してもっとうまく保育が行えるかもしれないと思う。
3	これからの保育では，保育者と子供が触れ合ってかかわっていく環境は残しつつも，iPadも取り入れてアナログだけではできなかった新しい体験をさせていくことが大切だと思う。幼児期には固定概念にとらわれずに様々なユーモアのある発想力を育てることが大切。ほかの人の意見を聞いて様々な考え方や捉え方があるんだということ知ってほしい。
4	ICTなどのデジタル機能を使って今までできなかったことを可能にしたり，子どもたちの遊びが発展され，デジタル機能に触れながら身につく力もある。しかし，働く力，考える力が衰える難点もある。保育者は今まで以上に子どもの姿をしっかりと捉え，子どもたちに足りない力を見分け，どこを伸ばすべきなのか明確にし，保育するべきだと思う。
5	幼児期は人生で一番大切だと思うので，様々な体験をして自信をつけていくことが大切だと思う。いまはかなりネットも普及している世の中なので，ICTも幼児期から取り入れていた方が良いと感じた。やりすぎはよくないが，たまに活用することで子どもたちにも良い刺激となる。ICTでしか味わえない，アナログでは難しいこともあるので，そのような場面で活用していったらよい。
6	デジタルの利便性を取り入れることでスムーズに活動することができる。それによって多くのアイデアが生まれ，想像力を育てる。
7	子どもたちの自主性を残し，保育者は子どもたちの考えを引き出す力が大切。ICTに依存，頼りっぱなしはよくないが，適度に取り入れて新しいメディアに触れることは稚拙だと思う。幼児期に自分で考える力周囲の友だちとコミュニケーションを取ったり，助け合う力を養ってほしいと思う。
8	ICTへの興味を持てる体験を与えることが必要だと思う。幼児期からの活用は子どもに表現する手段を増やすことにつながり，ICTへの拒否感を持つこともなくなる。
9	幼児期にはチームワーク力を育てるべき。ICTの活用は可能であればという程度でよいと思う。幼児期から電子機器を使っていると目も悪くなるし，他のものに目を向けなくなると思う。
10	すべての保育の場でデジタルに移行させるのではなく，アナログをメインに置き，デジタルを補助においた保育が今の時世にあっていると感じた。ただ，アナログで学べることの方が多いと思う。周りの環境に身体一つで関わることで一人一人違った素敵な体験が感じられる。それを奪えるだけの力をデジタル教材はまだ有していないように思う。
11	インターネットやアプリは幼児期から徐々に触れされるとよいと思う。強要するのではなく，インターネットで動画を見たり，アプリで絵本を書いたりと楽しみながらICTへの興味関心を持たせるのが良い。保育者もどのように工夫して子どもたちにICTに触れされるのかを考える必要がある。
12	「友達と一緒に」「協力して」ということをICTを活用する中で大切にしていく。ICTに偏るのではなく，一つの手段として今までのアナログの中に少しだけデジタルも取り入れる方が良い。両方の良いところをうまく教育に生かすことが大切。

3. 今後の課題

子どもとメディアに関する授業を通して，学生はメディアについての認識を広げられた。「避けるべき」「活用するべき」といった一面的な議論ではなく，「どういった目的で」「どのように」活用すると「どういう効果が得られるのか」「どういう悪影響があるのか」多面的に考えるきっかけになったと思われる。保育においてメディア活用する際には，選択したメディアを用いることが教育目的に合っているのか考えることが重要である。保育の目的を意識させて，メディアを用いた活動を立案する内容も取り入れていきたい。

メディアに対する認識の変容を時系列で調査するためにも，質問内容や方法をさらに検討していく必要がある。これから保育者になる学生にとって，新しい保育実践について知ることが有意義になるように，保育者養成校での教育について考えることが重要である。

【引用文献】

阿部和広・橋爪香織・谷内正裕（2014）．*5才からはじめるすくすくプログラミング*．日経BP社

阿部学（2015）．保育実践へのタブレットPC導入期の記録―「アプリの時間」以外での活用―．*社会とつながる学校教育に関する研究*，3, 9-15.

小平さち子（2007）．デジタル時代の教育とメディア②幼稚園・保育所におけるメディア利用の現況と今後の展望～2006年度NHK幼児向け放送利用状況調査を中心に～．*放送研究と調査*，57, 64-79.

総務省（2016）．情報通信白書平成28年度版.

旦直子（2013）．メディアと子どもの発達．教育心理学会年報, 52, 140-150.

ベネッセ教育総合研究所（2017）．*第2回 乳幼児の親子のメディア調査 速報版*.

堀田博史・松河秀哉・奥林泰一郎・森田健宏・深見俊崇・中村恵・松山由美子・佐藤朝美（2014）．タブレット端末を活用した保育での取り組み内容の調査．日本教育工学会 第30回大会 大会論文集，557-558.

松山由美子・堀田博史・佐藤朝美・奥林泰一郎・松河秀哉・中村恵・森田健宏・深見俊崇（2016）．保育現場での活用を想定した幼児向けアプリの評価観点の検討．日本教育工学会論文誌，40, 117-120.

森田健宏・堀田博史・佐藤朝美・松河秀哉・松山由美子・奥林泰一郎・深見俊崇・中村恵（2015）．乳幼児のメディア使用に関するアメリカでの最近の声明とわが国における今後の課題．*教育メディア研究*，21(2), 61-77.

【引用サイト】

おはなしづくりソフトiPad版／パソコン版ピッケのつくるえほん® ウェブサイト（http://www.pekay.jp/pkla）

株式会社スマートエデュケーション ウェブサイト（http://www.smarteducation.jp）